
ハヤテのメビウス

斎藤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテのメビウス

【Nコード】

N2764L

【作者名】

斎藤

【あらすじ】

怪獣がない平和な世界、その世界を侵略しようとするものがない、その脅威から大切な人達を守る為に執事は光の戦士と共に戦う！

戦いの始まり（前書き）

こんな物を書いてしまいました、駄文ですがお楽しみ頂ければ幸いです。

戦いの始まり

ウルトラマン、それは全宇宙の平和と秩序を守る光の戦士達の事である。

人々の笑顔が奪われそうになった時、遥か遠く光の国から彼らウルトラマンはやって来た、

そして光と闇の戦いが再び幕を開ける。

M78星雲 光の国

此処は光の戦士ウルトラマンの生まれ故郷である、此処にある宇宙警備隊総司令部に一人の戦士が召還されていた、

「大隊長が呼んでいるなんて何かあったのだろうか？」

彼の名はウルトラマンメビウス、宇宙警備隊のルーキーであり今の所地球防衛の任についた最後のウルトラマンである。

今彼は、宇宙警備隊大隊長のウルトラの父に呼ばれていた、

メビウスが総司令部に入ると宇宙警備隊隊長のゾフィーとウルトラの父が振り返る、メビウスを見るなりウルトラの父が言葉を発する、

「来たかメビウス」

「はい、ただ今」

メビウスはウルトラの父に返事をし本題に入った、

「大隊長、何故僕を呼び戻したのですか？」

メビウスに向かってウルトラの父は頷き話し始める、

「メビウス、お前には今一度地球に行って貰いたい」

メビウスは驚いた、何故なら宇宙皇帝エンペラ星人を倒し光の国に帰還してからは地球にはさしたる危機は訪れ無かったからだ。

「まさか！地球にまた危機が！」

メビウスは声を荒げる、だがウルトラの父の返答は意外なものだった。

「分からぬ、だが胸騒ぎがするのだ」

珍しく言葉を濁すウルトラの父を見てメビウスは再び地球へ行く事を決意した。

「わかりました、再び地球へ向かいます」

ウルトラの父はメビウスを見据えるとマントを翻し高らかに告げる、

「ならば再び行けメビウスよ掛け替えの無い星、地球へ！」

「はい！」

言葉少なく返事しメビウスは地球へ向け飛び立った。

メビウスを見送っていたウルトラの父は誰にも聞こえないように呟く、

「杞憂であってくればよいのだが・・・」

ウルトラの父の呟きが聞こえたのかゾフィーはウルトラの父を見遣る、だが何も言わずに総司令部を後にした。

メビウスの世界、早朝

光の国を出たメビウスは地球にしていた、今彼は地球上での姿『ヒビノ ミライ』になっている。

（もう少ししたらリュウさん達に連絡してみようかな）

メビウス・・・ミライは久しぶりに来る地球を楽しむかのように歩いていた、

人々が織り成す街の雑踏の中にミライは自分を見つめる白いワンピースで赤い靴を履いた少女を見付ける、

ミライはその少女に見覚えがあった、少女はミライに念を送ってくる

『もう一度助けて』

その少女の念話でミライは少女の事を思い出した、

「君は、僕を異世界へ導いた・・・」

少女はミライに頷き再び念を飛ばす、

『侵略者がまた別な世界を襲おうとしている、でもその世界に勇者達はいないの、お願いもう一度助けて』

少女の懇願にミライは頷く、

「分かりました、僕をその世界に送って下さい」

ミライの返事に少女は安心したように笑みを浮かべ更に念を飛ばした、

『ありがとうメビウス、貴方がその世界へ渡ればこの世界と貴方が行く世界を繋ぐ道が出来るわ、そこからなら貴方達の仲間を送れる

かも知れない』

少女の説明を受ける最中にミライの姿は薄れて行く、消え行くミライに少女は念ではなく声を掛けた、

「メビウス、いやヒビノ ミライさん、どんな時でもウルトラの光を決して忘れないで」

ミライは笑顔でグッドサインを少女に向け消えて行った。

同時刻 メビウスの世界とは違う世界の東京都練馬区

練馬区の面積の約半分の広さを持つ三千院家では借金執事が主人を起こそうと頑張っていた、

「お嬢様、起きて下さい！」

執事の名前は綾崎ハヤテ、年齢は16歳で超人じみた身体能力を誇っている、ひよんな事から三千院家に仕える執事となった、白皇学園という名門校に通っている男子高校生でもある。

結構前から主人の部屋のドアをノックしながら声を掛けていたが全く反応が無い、

ハヤテはもう一度口を開く、と突然横合いから女性が声を掛けてきた、

「あらあら、ナギも困ったものですわね」

彼女の名前はマリア、三千院家に仕えるメイドである、落ち着いた物腰で年上に見られがちだが実年齢はハヤテの一つ上で17歳だ。

「マリアさん！」

ハヤテはマリアが現れた事に安堵した、主人はマリアに頭が上がりないので彼女が起こせば素直には行かないだろうが起きては来るだろうと思ったのだ。

「ハヤテ君、ナギは私が起こしますのでハヤテ君は朝食の準備をしてくださいな」

マリアはハヤテにそう告げると主人の部屋の中に入って行った、ハヤテはマリアに言われた通りに厨房へと向かう。

数分後、ハヤテが朝食を作り終えテーブルに並べっているとマリアと共に金髪の少女が不機嫌な顔で起きてきた、

彼女こそハヤテとこの屋敷の主人の三千院ナギである、年齢は13歳ではあるものの頭が非常に良く飛び級で高校生をやっている才女だ、ただし、

「なあハヤテ、何で朝は来るんだろうな」

「お嬢様、朝から地球にケチをつけないで下さい・・・」

少々ダメ人間の気質はある。

しばし経ち、屋敷の玄関にハヤテとナギの姿があつ、ナギが制服姿なのでこれから登校するのだろう、

「じゃあマリアさん、行つてきます」

ハヤテは朗らかに見送りに来たマリアに挨拶をする、だがナギは不機嫌にさつさと屋敷から出て行つた、

「ちょっと、待って下さいお嬢様〜！」

2人を苦笑混じりに見送りマリアは屋敷内に戻ろうと振り向いた、しかし再び外を向き空を見上げる、空は鈍よりと曇っていた、

「あら、雨が降りそうですね」

一人呟きマリアは屋敷に入つて行つた。

ハヤテはほつとしていた、ナギの機嫌が良くなってきたからだ、この分なら白皇学園に着く頃にはすっかり元通りだろう。

「あらナギにハヤテ君じゃない」

不意に声を掛けられハヤテとナギは振り向く、そこにはピンク色の髪をした少女がいた、

「なんだ、ヒナギクか」

ナギは少女ーヒナギクを見るなりつまらなそうに言う、

「おはようナギ、ハヤテ君」

「おはようございますヒナギクさん」ハヤテもヒナギクに挨拶した、彼女は桂　ヒナギク、ハヤテとナギが通う白皇学園の生徒会長でありクラスメートだ、成績優秀、スポーツ万能でおまけに性格も良いと三拍子揃った少女だ、ただし極度の高所恐怖症である。

「それにしても嫌な天気ね」

ヒナギクは空を仰ぐ、

「ですよね」

ハヤテもそれに習い、ナギは

「こんな日は学校に等行かず屋敷でゲームをしていた方が有意義だ」と不機嫌に戻っていた。

「お嬢様、そう言わずに行きましょうよ」

「そうよナギ、それに私の前でサボるのは許さないわ」

ハヤテは宥めヒナギクは軽く注意する、ナギも2人、特にヒナギクと争うつもりは無いらしく割合大人しく歩いた。

ハヤテ達は時折他愛もない会話をしながら歩いていた、するとヒナギクが急に立ち止まる、

「どうしましたヒナギクさん？」

「何かあったのか？」

ハヤテとナギが口々に聞く、だがヒナギクはそれに応えず空中を指差した、

「あれ、何かしら？」

2人はヒナギクが指差した方を見る、見た先では黒い靄のような線が空からのびていた。

その靄の線は3つあり1本1本絡み合うようにしながら地面につく。

その靄の線は徐々に本数が増え竜巻のような姿をなした、

「お嬢様、ヒナギクさん何かおかしいですよ」

「そうだな」

「ええ」

今まで体験したことの無い異常な状況に3人は緊張する、

その竜巻が晴れると中から怪獣――宇宙怪獣ベムラーが現れた。

「な、何よあれ！」

「怪獣ですよ！」

「ベムラーか、また随分と懐かしいものを」

上から順にヒナギク、ハヤテ、ナギだ、

ベムラーは周りを破壊して回る、破壊光線がビルを幾つも薙ぎ倒した。

「逃げますよ、お嬢様、ヒナギクさん！」

ハヤテはナギの手を引いて走りだした、

「分かってるわよ！」

「しかし何でTVの中の怪獣が」

ハヤテ、ナギ、ヒナギクはベムラーとは逆方向に走り出す、だが、

「ね、ねえ何かアイツこっち向いていないかしら？」

ヒナギクが冷や汗をかきながら言う、ハヤテは恐る恐る後ろを振り向いた、

「確かにこちらを見てますね・・・」

ハヤテはヒナギクに答える、ベムラーは口を開ける、ハヤテとヒナギクが更に走る速度をあげようとした時、

「ちょ、ちょっと待ってく・・・れ」

ナギの体力が限界を迎えた、そもそもナギは運動が苦手なのだ、

そしてベムラーはハヤテ達に向かって破壊光線を放つ直前だった。

「・・・お嬢様、ヒナギクさんすみません！」

ベムラーの様子を見るなりハヤテはナギとヒナギクを突き飛ばした、

「ハヤテ！何をするのだ！」

「ハヤテ君！？」

ナギとヒナギクはハヤテを見る、それと同時にベムラーがハヤテ目掛けて破壊光線を放った、破壊光線はハヤテに降り注ぐ、

「ハヤテエエエー！」

ナギは絶叫しヒナギクはただ目を固く閉じるだけだった。

ハヤテはいつの間にか閉じていた目を開いた、そこは真っ白いだけの空間だが恐怖は無く何か暖かい感じをうけた、

「ここは一体・・・僕は死んだのか？」

周りを見渡しながらハヤテは呟く、

『君はまだ死んではないよ』

突然聞こえて来た声にハヤテは驚いた、

「な！誰ですか！何処から僕に話し掛けているんですか！」

珍しくハヤテは本気で狼狽する、するとハヤテの眼前にメビウスの輪のような形の光が現れる、ハヤテはその光に見覚えがあった。

「まさか貴方は！」

その光の後ろに巨人の姿が見えた、

『僕の名前はウルトラマンメビウス』

ハヤテは何も言えなくなった、無理も無いTVの中の人物が目の前に現れたのだから、

『君に頼みたいことがあるんです』

メビウスはハヤテに語り掛ける、

「僕に頼みたい事・・・ですか？」

メビウスはハヤテに頷く、

『今、この世界は侵略者に狙われています、でも僕はこの世界では自分自身の形すら保てないんです、だから・・・僕と一緒に戦ってくださいませんか』

ハヤテは一つの疑問を持った、

「何で僕なんですか？」

メビウスは穏やかな光を放ちながら答える、

『身をていして友達を助けた君の行動に深く感動しました、君ならこの世界を救える、そんな気がするんです』

メビウスは真摯に訴える、ハヤテはメビウスに強く頷き口を開いた。

「僕は・・・僕は大切な人達を守りたい、メビウスさん僕も戦いま

す！」

ハヤテの力強い言葉にメビウスは感銘を受けていた、

『行こう、ハヤテ君、君の大切な人達を守る為に！』

メビウスはハヤテの左腕にメビウスブレスを装着させる、ハヤテは左腕を構えメビウスブレスの中心部分にあるクリスタルサークルを回しパワーを解放する、

そして高々に叫ぶ、

「メビウーース！！」

ハヤテはメビウスの輪と共に光となった。

ハヤテがメビウスと話合っている頃、ナギとヒナギクは呆然としていた、ベムラーの破壊光線がハヤテに当たる直前に光の球がハヤテを包み込み破壊光線から守ったのだ、

「何なのよ、これは・・・」

ヒナギクは力無く呟く、自身の理解できる許容を越える出来事が起

こつてるのだから当然だろう、

そしてナギは一言も喋らずただ光の球を見ていた。

「ギャオオ!!」

ベムラーの鳴き声が辺りに響き渡りナギとヒナギクは置かれている状況を思い出した。

「ナギ!!」

ヒナギクはナギの手を引き走り出す、だがベムラーはそんな2人に向かって破壊光線を放つ準備を始めた、

「なっ!!」

ヒナギクはベムラーに背を向けナギを庇うように抱きしめる、光の球はナギからしか見えない、

ナギのしている前で光の球の輝きが増した、その光の球は『∞』の形の光を放ちながらナギ達とベムラーの間に入り込む、光の球が発した光を見てナギは呟くように言う、

「メビウスの輪だ・・・」

ナギの発した言葉お聞きヒナギクも振り返る、その瞬間ベムラーの破壊光線が放たれた、

だが、

「メビウース!!」

ハヤテの言葉が響き渡り破壊光線が掻き消された、更に光の球が強烈に輝く、

「これは!」

あまりの眩しさに目を細めナギは声を上げた、見覚えがある光景だったからだ、

そして光が消えそれは姿を現した、

赤いラインが入った銀色の体、胸に青く輝くカラータイマー、それはまさしく、

「ウルトラマン・・・」

「メビウス!」

ヒナギクとナギがそれぞれが見上げながら言う、

「シュワッ!」

2人が言うのと同時にメビウスは構えをとった、

「ガアア!」

ベムラーもまた雄叫びをあげる、

ウルトラマンや怪獣がない筈の世界での戦いが始まった。

戦いの始まり（後書き）

お読み下さりありがとうございました

始まりの終わり（前書き）

のっけからバトルシーン、上手く書けているか不安です。

お楽しみ頂ければ幸いです。

始まりの終わり

突如現れたベムラーから大切な人達守る為にメビウスと一体化したハヤテ、ナギとヒナギクを背にメビウスは構えをとった。

「ヘアッ！」

メビウスは駆け出しベムラーに拳を繰り出す、勢いに乗って放たれた拳はベムラーを怯ませるのに十分だった。

「ギャアッ！」

悲鳴をあげるベムラー、ナギとヒナギクから遠ざけるようにメビウスはベムラーを誘導していった。

「あのメビウスはハヤテだ」

ヒナギクと共にメビウスの戦いを見守っていたナギは断言するように言う、

「そうね・・・」

ヒナギクも同意し心配そうにベムラーと戦うメビウスを見る、

（ハヤテ君、死なないで、帰って来なさいよ）

ヒナギクは天にも祈るように願う。

「ハヤテ、頑張れ！」

ナギはハヤテを応援していた、だが、

「ギャアア！」

「ジュア・・・！」

隙を見て吐かれたベムラーの破壊光線でメビウスが大きく吹き飛ばされてしまう、ベムラーは吹き飛ばしたメビウスに向け再び破壊光線を放った。

「ハヤテ！」

「ハヤテ君！」

何とか立ち上がるメビウス、だがよろめき膝についてしまう、

苦戦するメビウス、その模様はTVで流されていた、その放送を様々な人物が見ている、

「大丈夫かな、負けちゃうんじゃないかな」

普通の女の子は避難所でTVを見ながら心配そうに呟いた、

「ナギにハヤテ君、無事でしょうか」

マリアは身内の無事を祈る、

「負けそうやんか、大丈夫なんかあれ！」

「大丈夫よ、あの方はとても強いから」

関西弁の突っ込み少女慌て和服の少女はそれを宥める、

様々な思いが交錯する中メビウスの援護に行く為に2機の戦闘機が飛び立とうとしていた。

「真木、いいのか、お前後少して退官だろ？」

戦闘機のパイロット2人が話している、呼び掛けられた方は真木というらしい、真木は頷き口を開く、

「いいんだ倉島、それに退官の前に日本を守るために戦えるなんて空自に入りたいいい記念になる」

話し掛けた方・・・倉島は「そうか」と笑いを浮かべる、そして真顔に戻り、

「死ぬなよ真木」

と言う、真木も応えた、

「倉島、お前もな」

そして2人は戦闘機――F-15イーグルに乗り込んだ。

メビウスはよろめきながらも構えをとる、その時カラータイマーが点滅を始めた、だがベムラーは容赦無く破壊光線を撃とうとする、

「ダメだ、ハヤテ逃げろ！」

ナギは思わず声をあげた、だがメビウスは逃げるところか向かっていく、

ベムラーはゆっくり口を開いた、

「ハヤテ君、駄目――！」

ヒナギクも悲鳴じみた声を出す、

その叫びを無視しベムラーが破壊光線を放つその瞬間、ベムラーの背中では幾つもの爆発が起こった。

「なっ!?!」

「えっ!?!」

ナギとヒナギクは驚きの声をあげる、その間にまたベムラーの体から爆発が起こった、

その爆発がミサイルによるものと気付いた2人は空を仰ぐ、そして見付けた黒く澱んだ空を切り裂くように飛ぶ2機の銀色の流星を、

「行け!」

F-15イーグルの中で真木は叫んだ、ベムラーはミサイルの直撃に怯み注意がメビウスからそれていく、

倉島のイーグルも見事な機動でベムラーを翻弄する、そして2人の眼下でメビウスは走りだしていた。

「シュア!」

メビウスはベムラーにしがみつき投げ飛ばす、

「ガアア!」

ベムラーは立ち上がり破壊光線を撃つ、だがメビウスはバリア、メビウスディフェンサークルを張り破壊光線を弾き返した、

「ガアッ!」

ベムラーはのけ反る、メビウスはそこに電撃光線ライティングカウ

ンターを放ちベムラーを吹き飛ばした、

よろめきながらもベムラーは立ち上がる、

メビウスは左腕のメビウスブレスに手を沿え左右に勢い良く腕を伸ばした、両手にはエネルギーを纏っている。

「あれは、勝ったな」

メビウスがこれから出す技を予想しナギは勝利を確信した、

「ハアア・・・」

息をはきながらメビウスは両腕を頭上に持って行く、両腕が頂点に達すると両手のエネルギーが反応しメビウスの輪を形作る、

メビウスの様子を見たベムラーは青い光の球になって逃げようとした、だが、

「シューアア！」

メビウスは腕を十字に組み必殺光線『メビュームシュート』を放った。

青い光の球となったベムラーにメビュームシュートは吸い込まれるように命中し爆発を起こした、

メビウスはゆっくり構えを解く。

「やった・・・やったぞハヤテ！流石は私の執事だ！」

ナギは喜色満面といった表情を浮かべ、

「はー、良かったわ、無事で」

安堵の溜め息をつきヒナギクは微笑んだ。

「倉島、行くぞ」

「ああ」

真木と倉島のイーグルに向けメビウスはグッドサインを送る、

真木と倉島は敬礼を返し基地へと飛んで行く、ベムラーを倒したからか空は晴れ渡り太陽の光がイーグルに反射し本当の流星のように見えた。

メビウスは光となりナギとヒナギクの前に降りてくる、光がおさまるところにはハヤテが立っていた、

「お嬢様、ヒナギクさん申し訳ありませんでした！」

元に戻るなりハヤテは頭を下げた、

「「え？」」

ナギとヒナギクは同時に疑問の声をあげた、

「あの時突き飛ばしてしまつて、本当に・・・」

ハヤテは頭を下げたまま言つ、ナギはハヤテの謝罪を鼻で笑つ、

「ふん、そんな事はどうでもよい・・・でもなあんな死に逝くような真似、もう一度したら許さないからな！」

ナギの言葉にハヤテはたじろぐ、ヒナギクもナギに頷き口を開いた

「そうよハヤテ君、もう二度とあんな真似はしないって約束出来るかしら？」

大きな声をだしたナギとは違いヒナギクは静かに圧力を掛けてくる、ハヤテは冷や汗をかきながら答えた、

「わ、わかりました・・・」

しどろもどろに答えるハヤテを見てナギは不機嫌そうに顔をそらし、ヒナギクは溜め息をついた、

「ではお嬢様、学校へ行きましょうか？」

ハヤテはナギを促すだがヒナギクが静止を掛けた、

「ちょっと待ちなさい」

ハヤテはヒナギクの方を向く、ヒナギクも不機嫌そうな顔をしている、

「えっ、ヒナギクさん何かまずい事でも」

ヒナギクは携帯を手に行っている、

「今お姉ちゃんから連絡があっただけど・・・今日は休校だそうよ」

ヒナギクの言葉を聞いたナギは直ぐさま来た道に戻りだした、

「お嬢様！待ってくださいよ！」

「ハヤテ、何を言っているのだ！学校は休みなのだろう、なら早く帰らないと損ではないか！」

「いやいや、その考えはどうかと思います！」

ハヤテは引き止めるがヒナギクが口を挟んだ、

「いいわハヤテ君、あんな事があつただもの休校になるのも無理ないわよ」

ハヤテはヒナギクを見る、何時に無く優しいなとも思つたのかも
しない、

「ま、ナギには明日注意しておくわ、ハヤテ君あなたが1番疲れているんだから今日はゆっくり休みなさい」

ヒナギクの気遣いにハヤテは頷いた、

「そうですね、ではお言葉に甘える事にします」

ハヤテがヒナギクに頭を下げるとナギの声が聞こえてきた、

「ハヤテ、いつまでヒナギクと話しているのだ、さつさと帰るぞ」

「はいはい、お嬢様！今行きます、ではヒナギクさんまた明日！」

ヒナギクに一礼しハヤテはナギの元へと駆け出した、

「ではお嬢様、帰りましょうか」

ハヤテはナギの目を見ながら言う、

「うむ、では帰ろう！」

行きとは違いナギがハヤテの目の前を歩く、眼前のナギの小さな背中を見ながらハヤテは

（この人を守れて良かった）

と思っていたとかいなかったとか。

メビウスがベムラーハヤテとナギが歩いて行くのを高いビルの上から3人の人影が見ていた、

1人はハヤテと同じように執事服を来ている事からただの付き人だろう、

残りは2人だが1人はハヤテと同じ年代の金髪の少女だ、

そしてもう1人は黒い靄のようなものを纏う怪人だった。

金髪の少女が口を開く、

「あれが貴方達の敵、光の戦士ね」

怪人は頷くそぶりをする、少女は身を翻しビルの上に着地していた
へりの中にはいる、

執事もそれに続き怪人はその場から溶けるように消え去った、

へりの中で少女は誰ともなく口を開く、

「まさか、光の戦士と王玉がどちらも一緒とはね、まあ、あちらから私達の方に来るでしょうから、そこまでは『私』は事態を静観しましょう」

少女は一旦言葉を区切り笑いを浮かべた、

「私と会うまで死なないでね、ハヤテ」

少女を乗せたへりは彼方へと飛び去った。

始まりの終わり（後書き）

このような駄文をお読み下さり有り難い限りでございます、では次回で

ゴルザ襲来（前書き）

すみません、ゴルザは少ししか登場しません。

今回も駄文ですがお楽しみ頂ければ幸いです

ゴルザ襲来

東京都練馬区、三千院家この日本有数の豪邸は何時も通りの騒がしさだった、

「ハヤテのバカーー!!」

突然のナギの怒号が聞こえマリアは聞こえた部屋へと向かう、

（ここから聞こえましたね）

部屋の前に来たマリアはドアを開けた、

部屋の中ではハヤテが床に倒れておりそのハヤテの隣にはW〇iが壊れかけた状態で落ちていた、

「えーと・・・」

部屋の惨状を見てマリアは言葉を詰まらせる、状況を把握するためにマリアはにハヤテに話し掛けた、

「とりあえず生きてるなら、順を追って説明してもらえます?」

「イ、イエッサー・・・」

応答するハヤテの声は今にも消え入りそうだった。

少したちハヤテはまだ痛む頭を摩りながらマリアに状況を説明する、

「僕はお嬢様と大怪獣バ〇ル ウ〇トラコロシウムDXで対戦していたのですが、僕の運がいいのか全戦全勝で・・・」

「それで機嫌が悪くなったナギにW〇iを頭に投げられたのですか」

「はい・・・」

ハヤテの説明の中マリアは

（ハヤテ君、数少ない運をこんな所で消費しなくても・・・）

内心ハヤテを哀れんでいた、

「まあナギもそのうち機嫌を直すでしょう、今はそっとしておくのが1番です」

ナギの性格を考えると下手に宥めるのは逆効果だ、マリアは勿論ハヤテもその事は痛い程分かっている、そのためハヤテはマリアに頷きその考えに同意した、

「そうですね、分かりました」

「私はナギの様子を見てくるのでハヤテ君は部屋を片付けていて下さいね」

ハヤテとの会話を切り上げマリアは部屋から出て行く、それを見送りハヤテはW〇iを拾いあげた、

部屋を片付けたハヤテは1人考え込んでいた、

（うーんやつぱり子供心は難しいな・・・前にムシ〇ングで遊んだ時にも同じような事になったし）

考えながらハヤテはドアに手を掛ける、だがハヤテが開ける前にドアが開き MARIA が顔を出した、

「MARIAさん、どうかしましたか？」

「ナギがふて腐れて屋敷の外にでていったようなんです」

ハヤテは MARIA の言葉に驚いた、

「お嬢様がですか、いつもは引きこもりなのに・・・どこに行っただんですか？」

物凄く失礼な事を言ったハヤテに MARIA は冷や汗を流すが否定も注意もしなかった、MARIA も若干同じような事を思っていたからだ。

「・・・とりあえずハヤテ君、ナギはワタル君の所にいるみたいなので迎えに行つてあげて下さい」

MARIA の命令というか頼みにハヤテは頷く、

「わかりました」

「じゃハヤテ君、頼みましたよ」

マリアが出て行きハヤテは外出の準備を始めた。

ハヤテが屋敷を出る頃ナギはVショップタチバナというレンタルビデオショップに居た、

ナギはカウンターの内側に座っており一見するとバイトのように見える、

そんなナギの前に普通の女子高生の客がレンタルするためにDVDを複数カウンターに置いた、

ナギはそのDVDを一通り見ると口を開いた、

「何だこれは、当たり障りのない青春映画ばかりではないか」

ナギは侮蔑するように客に言う、客は声をあげた、

「ナ、ナギちゃんには関係ないんじゃないかな」

「ま、ハムスターにはお似合いか」

ナギの言葉にハムスター……もとい西沢 歩は怒ったような声でナギに詰め寄る、

「ハムスターじゃない！」

「いいややっぱりお前はハムスターだ、この普通の人々が！」

「普通の人々って何かな！？」

しばらくナギと歩の不毛な言い争いが続くためこの辺で歩の説明を、

西沢 歩、ハヤテが白皇に通う前に行っていた学校の同級生、ハヤテの周りにいる人物の中では唯一『普通』という言葉が似合う少女である、ハヤテに淡い恋心を抱いている、ナギとはよく口喧嘩をしているがそれは仲良しの裏返しだ。

ん？ナギと歩の言い争いが終わったみたいですね、それでは続きをどうぞ。

ナギと歩は肩で息をしていた、

「あれ、そういえばナギちゃん何でここにいるのかな？」

今更な質問をする歩をナギは冷ややかな目で見る、

「それを今更聞くか、やはりハムスターは馬鹿のようだな」

歩はムツとしてナギに反論する、

「そんな事言う事ないんじゃないかな？」

ナギと歩は睨み合う、そしてまた言い争いが起きようとした刹那、店の奥から少年の声が聞こえて来た、

「いい加減にしろー！」

その声と共に奥から少年が出て来る、少年の名前は橘　ワタル、ナギと同じ年でこのビデオショップの店主である、何故ナギと同じ年の少年が店主なのかはまた別の機会に、

「お前ら、店の中で喧嘩何かしてんじゃないやねえ！喧嘩するなら外でやれ！」

鬼の形相で言うワタルを見て2人は喧嘩をやめた、ワタルはナギに向かって口を開く、

「大体ナギお前勝手に店番やってんじゃないやねえ！部屋に居ろって言っ

ただろ！」

まくし立てるワタルにナギは言い返す、

「ふん、いちいち細かい事を、それでは伊澄には振られてしまうな！」

「いつ、伊澄は関係無いだろ！」

今度はワタルとナギが言い争いを始めてしまう、

「ちょっ、やめなよ」

仕方なく歩が止めようとするが、

「だまれハムスター！」

「だからハムスターじゃ無いってば！」

歩も参戦してしまった、3人の言い争いがヒートアップする、そこに若い女性の声が響いた、

「若！西沢さん、ナギさんやめて下さい！」

その場にいた全員は声のした方を向く、視線の先では眼鏡をかけたメイドが3人の元へ駆け寄ってくる所だった、

「お、おい！落ち着けサキ！」

サキと呼ばれたメイドはワタルが静止の言葉を言うのとほぼ同時に派手に転んだ、その衝撃で周りの棚にあったDVDがサキの上に降

り注ぎ彼女は埋まってしまった、
それを見ていたナギ達は『またか』と思った、彼女、真嶋 サキは
見た目は有能そうだがかなりミスが多く所謂『ドジっ娘』なのだ。

「たくっ」

ワタルは溜め息1つ吐きはDVDを片付ける、歩とナギも手伝い順
調に棚に並べられた、

だが地震が発生しまたDVDが転げ落ちる、

「……」

ナギ達は徒労感一杯になった、

「これで終わりだな」

ワタルが最後のDVDを棚に上げて片付けは終了した、ナギは特撮
コーナーにある『ウルトラマンメビウス』のDVDを見ている、そ
の顔には後悔の念が浮かんでいた、

「ナギちゃん、またハヤテ君と喧嘩したんじゃないかな？」

その様子を見ていた歩が話し掛ける、唐突な歩の言葉にナギは飛び上がる、

「け、喧嘩なんかしてはおらん！」

狼狽しつつ否定するナギに歩は微笑み掛ける、

「なんなのだ、その笑いは！」

ナギは詰め寄り歩は一步後ろに下がる、また喧嘩しそうな雰囲気だがワタルは無視した、外にハヤテの姿が見えたからだ、

「お嬢様〜！」

ハヤテはナギを呼ぶ、だがナギは意地を張っているのか返事もしない、

「ナギ」

「ナギちゃん」

ワタルと歩が声を掛ける、ナギはまだ答えない、

「お嬢様、帰りましょうか？」

ナギに向かって手を差し延べつつハヤテは言う、そんなハヤテにナギはようやく答えた、

「ふん、そこまで言うならば帰ってやろう！だが帰ったら今度こそお前に勝って見せるからな！」

強がりと言ってナギはハヤテの方へ行く、ハヤテはワタル、歩、サキに軽く頭を下げた、

「ワタル君、西沢さん、お嬢様がお世話になりました」

そう言ってハヤテとナギは出て行くとする、その時また地震が起こった、

「ま、また地震じゃないかな！？」

「言われ無くてもわかる！」

揺れながらも会話をするワタルと歩、地震は収まる気配が無い、

「わ、若！この地震おかしくありませんか？」

サキが疑問を口にする、

「そ、そうですね、確かにおかしい気がします」

ナギを支えながらハヤテが同意する、そんな中にも地震はどんどん大きくなっていく、

そして、

「ギャオオオ！」

地面が割れその中から『超古代怪獣ゴルザ』が現れた、

「か、怪獣じゃないかな！」

「ゴルザ！」

「今度はティガか」

上から歩、ワタル、ナギである、ハヤテはゴルザを見るなり声を上げた、

「皆さんお嬢様達を宜しくお願いします！」

「」「」「了解！」「」「」

「G I G！」

ハヤテが発した言葉で黒服の集団『三千院家SP』が何処からとも無く出て来た、

「おい！1人G U Y Sがいるぞ、いいのか！」

ワタルは思い切り突っ込む、だがその突っ込みは黙殺されワタル達

は抱え上げられる、

勿論ナギは1番厳重に警備されていた、そのナギはハヤテを見る、
ハヤテは頷きゴルザの方へ走り出した、

「ハヤテ君！」

「何してんだ借金執事！」

歩とワタルは余りに無謀なハヤテに声を上げた、その2人に向かってナギは口を開く、

「いいのだ！」

言い切ったナギにワタル達は反論しようとした、だがナギはハヤテが向かった方向をじっと見ていた、その視線をなぞるようにワタル達も同じ方向を見る、

視線の先に光が生まれその光がゴルザの眼前に迫る、

光が収まりウルトラマンメビウスが現れた、

「メビウス！」

ワタルはメビウスを見て喜びの声を上げた、

「シュア！」

メビウスはゴルザと組み合う、だがゴルザの力はベムラーよりも遙かに高くメビウスが投げ飛ばされた、

「ガアア！」

ゴルザは額から破壊光線を放った、メビウスは転がり込みなんとか破壊光線を避け立ち上がる、

「シエア！」

メビウスはメビウスブレスから光の剣『メビュームブレード』出現させゴルザに切り掛かった、

メビュームブレードはゴルザの脇腹を切り裂きゴルザは悲鳴を上げる、

「ガアア・・・」

メビウスはメビュームシユートを放とうと構えをとった、だがゴルザは地面に向け破壊光線を放ちそのまま地面に潜って逃げに行った。

メビウスは光に包まれハヤテに戻る、ハヤテはナギ達の下へと走って行った、

ナギ達はゴルザが逃げて行ったのを見てほっとしていた、そこにハヤテがやって来る、

「お嬢様〜〜！」

ハヤテに気付いた歩が駆け寄る、

「ハヤテ君、大丈夫かな！？」

ハヤテは歩に頷く、歩は朗らかに「良かった」と言った、

「さてと、ハヤテ帰るぞ」

「分かりましたお嬢様！」

ハヤテとナギは歩き出す、すると、

「ちょっと待つて欲しいな？」

と歩が呼び止めハヤテと並んだ、

「私も一緒に行つていいかな？」

歩がナギにきく、ナギは不機嫌そうに、

「ま、いいぞ」

と短く答えた、歩は嬉しそうに笑い一緒に歩き出した。

その日の夜ナギとハヤテは大怪獣バ〇ル ウルトラコ〇シアムDX
をプレイしていた、

「今度は勝つからな！」

そして1時間後

「ハヤテのバカーー！」

案の定ナギの怒声が夜の練馬区に響き渡る。

「はあ、ナギもハヤテ君も懲りませんわね」

マリアは1人呟いた。

ゴルザ襲来（後書き）

お読み下さり有り難うございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2764/>

ハヤテのメビウス

2010年10月8日14時28分発行